

マクロ経済学A

マクロ経済学と日本経済

2018年4月24日

第3回

ここから、GDPの概念に入る

- 国内総生産（GDP）をおおよそ以下のように理解すること
 - 国内で1年間に生産して得たお金＝「所得」という
 - 国内で企業が1年間に作り出したモノ・サービスの価値（お金で測る）
- この金額が多いほど豊かに暮らせるし、生産能力も発揮されている

名目GDPと実質GDP

- 国民全体がもらったお金(GDP)が、2005年には約500兆円あった。2006年には、経済成長率が1.3%であった。(GDPは、2006年には、6.5兆円ぐらい増えていた。)
- しかし、2006年には、それで買えるモノ・サービスの価格の全体が0.9%ぐらい下がっていた。これを物価下落(デフレーション)という。
- モノ・サービスがどれだけ買えるかを表すのが、実質GDPである(お金の単位で表すGDPは、名目GDPといって、わざわざ区別する)。

実質GDPとは？

- 実質GDP = 名目GDP ÷ 物価水準

	名目GDP	物価水準	実質GDP
2005年	500兆円	1	500兆円
2006年の増加率	1.3%	-0.9%	2.2%
2006年	506.5兆円	0.991	511兆円

- 名目経済成長率 - 物価上昇率 = 実質経済成長率

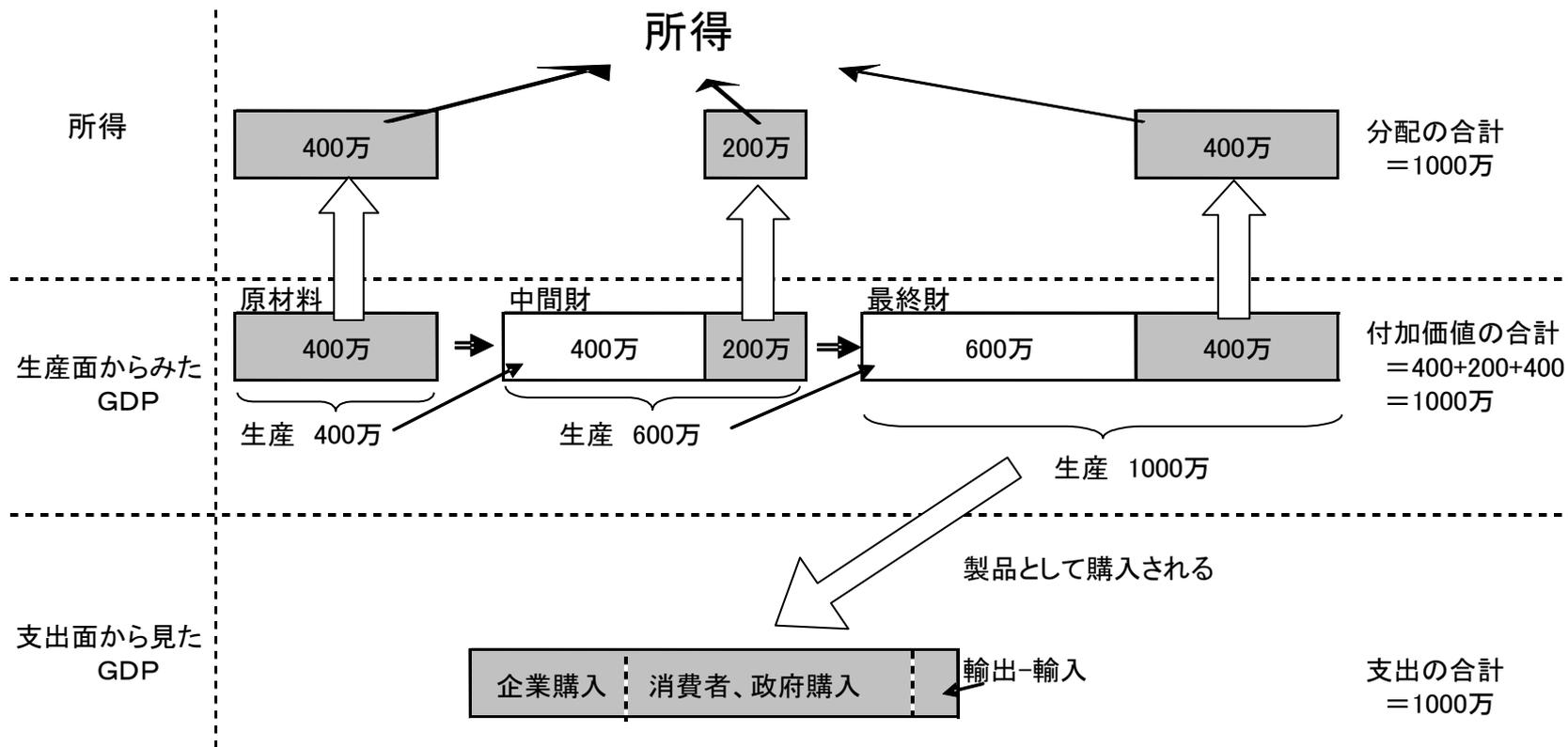
GDPの正確な概念：導入

- 国内総生産：日本国内で生産されたモノ・サービスがどれだけあるか見たい。
- 日本に生産工程を担う企業が3社しかいないと考える。
- A社は、1年間に自動車部品を400万円生産。B社がそれを全部買って、それに加工して600万の部品を作成する。C社がそれを買って、1000万円の自動車にする。
- そのとき、A、B、Cが新たに生み出した価値はいくらだろうか??
- 新たに生み出した価値を「付加価値」という。

生産するのは企業

- 企業だけが生産する主体（会社でも個人事業主でもよい）
- 企業は、人間ではない。生産のための組織である。
- 企業の所有者は資本家である。彼らは、株主であるが、社長とは限らない。
- 企業が、人間を雇い（雇用）、工場・事業所・機械を入手し（買ったたり借りたり）、それで生産を行う。
- 企業が生産をして、付加価値を創造する。

生産面からのGDPは中段： 付加価値の合計



生産して得た価値（所得）の合計はいくらか？

- A, B, Cの構成員がそれぞれ生産して得た（所得という）は、いくらになるか。全体の合計はいくらか。
- 所得は、労働者と資本家（会社所有者：株主）が得た付加価値と同じもの。この例では、A、B、Cが一人の人でなく、企業と考えれば、労働者も資本家もいる。
- 付加価値のうち、労働者に「賃金」を支払い、残りは資本家にとってしまう。
- 所得の合計は、GDPである。

復習問題

- 次のうち、GDPはどれか。
 1. ある国の中で、1年間に企業が生産した生産物の金額。
 2. ある国の中で、1年間に企業が生み出した付加価値の金額
 3. ある国の中で、人間が生産に関して受け取った金額(賃金と利潤)
 4. ある国の中で、人間が受け取ったすべての金額(賃金、利潤、株式売却利益、土地売却利益)